

テーマ：演奏は予感の芸術

～フィード・フォワード(イメージ)を
ピアノ教育に生かすには～

講 師：小池 ちとせ

東京藝術大学卒業。同大学大学院を首席で修了。野村賞受賞。毎日新聞社主催NHK後援第23回全日本学生音楽コンクールで全国第1位受賞。ソロ、室内楽の各分野で意欲的な活動を続けており、NHK-FMに度々出演した他、現代音楽の分野にも積極的に取り組み初演作品も多い。コラボレイティブピアニストとしての活動も多彩で、内外の著名なアーティストと数多く共演しており、オーケストラプレイヤーとしてもメジャーオーケストラから絶大な信頼を得ている。共著に「ピアノの秘密」「オーケストラの秘密」。現在、武蔵野音楽大学教授。

要 旨

演奏は予感の芸術である。

時間と共に過ぎ去り、ある意味瞬間芸とも言える演奏が上手になりたい、あるいは上手くしたいという欲求は誰でも持ち合わせているが、私はそれを解く鍵は「フィード・フォワード～feed forward」、すなわち自分が表現したい演奏を明確に思い浮かべてイメージすることだと考える。この「フィード・フォワード」は演奏前のみならず演奏中にも行われている。言い換えれば未来の音を具体的に思い浮かべることができれば演奏は飛躍的に進歩するということだ。

iPS細胞でノーベル賞を受賞した山中伸弥教授がよく使う言葉に「ヴィジョン&ワーク～Vision & Work」がある。これは氏がアメリカに留学した時に恩師から言われて転機となった言葉だそうだが、ヴィジョン(結果の予想)無きワーク(実験)は無意味であるということである。この言葉が元になって膨大な数の実験からiPS細胞が生まれた。つまり明確な目的無しにどんなにハードなワークをしても結果は生まれないということだ。これは演奏にも当てはまり、どのような演奏を作り出すのか明確なイメージ無き練習は無意味だということである。

実はフランスが先達のソルフェージュ教育をはじめ、楽典、楽曲分析、音楽史など、音楽を取り巻く学習の全ては「フィード・フォワード」を獲得するための材料に他ならない。近年、フランスではこれらの学習を総合してフォルマシオン・ミュージカル～formation musicaleと位置づけ総合的な音楽教育を行っている。

本講座では、実際に「フィード・フォワード」を手に入れ実現するにはどうしたらいいか、先人達の例を挙げながら脳と身体の両面からのアプローチで検証する。